世界史の中で「清朝」を問い直す決定版！　刊行迫る!!　五月刊

清朝とは何か（上）

――〝清朝は中国ではない〟――

岡田英弘
（聞き手）編集長

「十三世紀に、世界史が始まった」

――清朝というのは、古代から現代までつながる中国の一時期であるということが通説になっておりますが、先生はそうではなく、「清朝は中国ではない」というお考えとうかがっています。

また日本では、日本史・世界史、あるいは東洋史・西洋史と分けられています。そういう中で、少しずつ世界史的視点が大切ではないかと、注意が払われてきつつあるようです。先生の『世界史の誕生――モンゴルの発展と伝統』（ちくま文庫）というタイトルにありますように、十三世紀のモンゴル帝国から重視しておられます。

今日お聞きしたいのは、〝清朝とは何か〟ということですが、モンゴルと不可分ということでしょうか。

不可分です。分けてはならないということですね。清朝は元朝を継承した。そして元朝はモンゴル帝国の一部である。十三世紀初めにモンゴル帝国が起こったあととそれ以前とでは、世界が全然違ってくるのです。一二〇六年にチンギス・ハーンが即位して誕生したモンゴル帝国は、二代目には東ヨーロッパまで広がりました。ユーラシア大陸の内陸部に存在していた国々はみな吸収されてしまい、その後できたものは、すべてモンゴル帝国の後裔です。

世界史を考えたとき、モンゴル帝国以前の世界に、果たして有機的なつながりがあったかというと、いわゆるアジア世界とヨーロッパ世界は一つの単位ではなかった。お互いあまり関係がなく、それぞれの世界の中で物事が完結していた。そういう時代に世界史があっただろうかというのが前提にあります。

世界において歴史という概念が独自に誕生したのは、中国と、それから地中海およびヨーロッパ地域の二つだけで、それらの歴史文化は別々に存在していました。同時代を単純に横につなげれば歴史になるというものではないのです。

――つまり、交易がなかったという……？

交易はありましたが、時代を変えるようなものではなかったのです。要するに、中国世界と地中海世界は、文化の基盤も枠組みもすべてが違っていて、その間に、いわゆるシルクロードなどを通じて人と物が細々とつながっていましたが、両者の文明の間に有機的な関係はほとんどありませんでした。これが、日本の歴史教育で、いまだに西洋史と東洋史が統合できない理由です。

▲岡田英弘（1931－　）
歴史学者。東京外国語大学名誉教授。主著に『歴史とはなにか』（文藝春秋）『世界史の誕生』（筑摩書房）『中国文明の歴史』（講談社）等。

では、世界史とはどういうものだと考えるか、と言いますと、十三世紀のモンゴル帝国を時代区分として、それ以前、それ以後とで見方を変える。モンゴル帝国以前は地方ごとの文化・文明の有効な時代ですが、**十三世紀以後は、ユーラシア全体を通した視野で見ないといけない時代に入ります。**十五世紀に大航海時代が始まったとふつう言いますが、本当はその前の**十三世紀に、人と物の交流が大規模に始まった。世界史がスタートした、というのが私の唱えた新説です。**

清朝とモンゴル

――なるほど。では、モンゴルから清朝誕生までを教えてください。

いわゆる中国史においても、モンゴル時代から歴史が変わりました。というのは、モンゴルの建てた大元以前の王朝の名前は、春秋時代からすべて地方の名前なんです。漢も隋も唐もそうです。三国時代の**魏・呉・蜀**、それから**宋**、全部そうです。契丹時代もまだその伝統が続いていて、契丹帝国の中国式の国号である**遼**は、彼らが遼河の出身だったからです。その次の**金**も、支配層の女直人が今のハルビン近くの**按出虎水**（アンチュッガイ）（アンチュン川）の出身だったから、このような国号にしたのです。アンチュンは女直語で金という意味です。

ところが、元朝は違います。「大哉乾元（だいなるかなけんげん）」という『易経』の文句から取ったのです。「大元」は天を意味します。次の「大明」は、白蓮教の用語で救世主を「明王」と呼ぶことから来ています。その次の清朝の国号「大清」は、「大元」と同じく、天という意味です。

ともかく、モンゴル帝国を時代区分と

して、それ以前とそれ以後は違う。中国世界ではいつも漢字を使っているから、ずっと同じで連続してきたと日本人は思うけれども、じつは王朝が交代するたびに、支配層は完全に入れ替わったわけです。モンゴル人の建てた大元は、チンギス・ハーンの受けた天命を中国に持ち込みました。天上には唯一の神様がいて、天下である地上は自分たちチンギス・ハーンの子孫だけが統治する権利がある。こういう思想を持ってモンゴル人は世界統治を始めたわけですが、満洲人の建てた大清は、元朝のアイデアを継承して、自分たちの国号をつくったということです。

後金国から清朝へ

――清がかなり大きな規模で統一していったのは、いつごろですか。

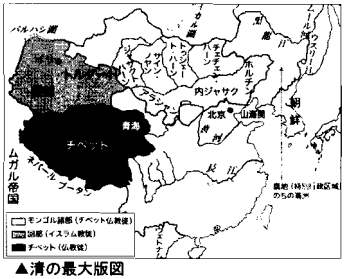
清朝は、一六三六年に満洲族とモンゴル族が一緒になってつくった王朝です。そのあと一六四四年になって、万里の長城の南の明が滅亡したので、その支配下にあった中国の漢族が加わりました。それから十八世紀になってから、チベット、新疆が支配下に入った。チベットや新疆は、清朝にとってはあとから加わった付随的な部分で、これを取り去ってしまうと、下から現れるのは満洲とモンゴルと中国の連邦です。

一六一六年にヌルハチが遼東につくった後金国が、大清帝国の原型です。明末に後金国が建国された遼東は、モンゴル人と、女直人のちの満洲人と、漢人の三種類の人たちが接触するところでした。日本人は遼東というと、旅順・大連のある遼東半島だと思いがちですが、**本来の遼東は遼河の東のことで、瀋陽や遼陽があるところです。**遼河の西という意味の遼西は、日露戦争直前までモンゴルの遊牧地でした。だから瀋陽は、東部内蒙古と呼ばれる、満洲国時代に興安省となった地域のモンゴル人にとっては、一番近い中国の街だったのです。

遼東は、万里の長城よりも外側の、つまりは夷狄の土地なのですが、昔から漢人というか農耕民が植民できる場所でした。春秋戦国時代の農耕遺跡も出ています。ただし、遊牧民の力が強くなったら追い出される。モンゴル帝国時代は、もちろん全部がモンゴルの領土でしたが、モンゴル人は、朝鮮半島から連れてきた高麗人を遼東に入植させて、農業をさせました。明と北元に分かれたとき、明は、農業ができる場所に辺牆という木の柵をつくって遼東一帯を囲い込み、飛び地として明の領土にしました。です

から、明代の遼東の漢人は、そのほとんどが高麗人の子孫なのです。

明の支配下にあった遼東に貿易に来たのがヌルハチの祖先たちで、彼らにとっては、明との貿易が一番金がもうかります。それで辺牆の内側と外側で貿易が盛んになっていき、ヌルハチの時代に明軍を破って、この一帯を全部とってしまいました。こうして、満洲人、モンゴル人、漢人という、言葉も生活も違う三種類の人たちが、ヌルハチのもとに集まって、後金国が建国されました。これが最初の核となり、



▲清の最大版図

のちにホンタイジが引き継いだときには、かなり拡大しています。ヌルハチの時代には、北元のモンゴル人のなかで、チンギス・ハーンの弟の子孫であるホルチン部など、ごく一部が参加していただけだったのが、ホンタイジは、北元の宗主リンダン・ハーンの遺児から元朝の玉璽を譲られ、ゴビ砂漠の南に住むモンゴル人全員を家来にすることができました。北方でも満洲のかなりの領域を押さえ、さらに、明の家来だった将軍たちが、たくさんホンタイジのもとに逃げてきています。だから、一六三六年の大清帝国は、ヌルハチのときよりも、規模がずっと拡大していました。

しかし、満洲人・モンゴル人・漢人の合同政権であるという枠組みは、そのままでした。大清帝国の公用語は三つあり、文字も三体それぞれ異なっている。

それが一九一二年までずっと、建前としては続いていました。ラスト・エンペラーになる宣統帝溥儀が一九〇八年に即位したときもなお、皇帝号も年号も三つあります。満洲語もモンゴル語も使われています。モンゴル人は漢字を使いませんから、個々の清朝皇帝にモンゴル語の名前があり、モンゴル語の暦をそのときも使っているんです。ちゃんと記録があります。このように見てくると、清朝というのは果たして最後まで、中華王朝と言えるようなものだったのだろうか、ということになりますね。（後略）

（全文は『清朝とは何か』に収録）

（おかだ・ひでひろ／東京外国語大学名誉教授）

別冊『環』⑯
清朝とは何か
岡田英弘編
岡田英弘／宮脇淳子／楠木賢道／杉山清彦他
菊大判　予三二八頁　図版多数　予三九九〇円

世界史の中で「清朝」を問い直す決定版！　いよいよ刊行!!

清朝とは何か（下）

――大清帝国の誕生――

岡田英弘
（聞き手）編集長

清朝の国家モデルは何か

――ヌルハチ、ホンタイジあたりが、清朝をどういう国家システムにするか、どこか参考にするものはあったんでしょうか。

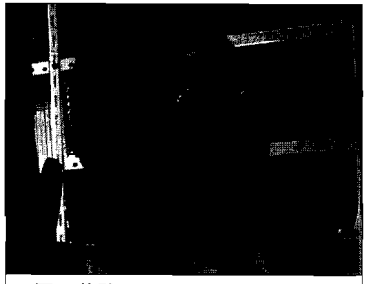
そういうものはなかったと思います。清朝は、元朝の天命の思想は継承したのですが、国家システムは元朝とは大分違う。満洲人はモンゴル人のような遊牧民ではありません。そこに決定的な違いがありました。モンゴル人は、ユーラシア大陸の人なんです。**モンゴルは文字も文化も、西につながっている。**彼らは遊牧民でしたから、草原が続いている限り、どこまでも行けました。ヨーロッパにでも平気で行く。**ロシアとの関係が非常に深い。**最初から西方に向かって開けていました。それで、キリスト教だって、早い頃に入ってきましたし、モンゴル帝国の後裔たちはイスラム教も受け入れました。モンゴル草原までは、何でも西から文化がずっと伝わって来ているんです。

でも満洲人は日本人と同じく、結局あまり動けない場所にいる人たちなので、モンゴルの遊牧文化をそのままでは継承しなかったんですね。では、どのように清朝の国家システムのアイデアが生まれたか、これは未解決の問題です。しかし、やはり、先ほど言ったように、三種類の人たちがぶつかる遼東という土地の特徴だと思います。**ぶつかり合って、競合して、共存していく土地から、大清帝国が誕生した。**

中国の王朝システム理解の盲点

――すると、どういうものを下敷きにしながら、統治システムをつくっていったのでしょう。

中国史で一番問題なのは、同じような中国王朝がずっと続いてきた、とやみくもに思っていることです。これは二十世紀の日本の東洋史の責任でもある。同じ漢字で同じ文字を書いているから同じだろうと思いこむのですが、実際には、そのときそのときの時代によって全然違う仕組みだったのです。つまり、各王朝の支配層は違う土地の出身でしょう。**中国五千年というのは、二十世紀になってからのキャッチコピー**で、紀元前二二一年に中原を統一した秦の始皇帝が、今の言葉でいう中国をつくった出発点の人なのですが、漢は、秦の始皇帝のやり方をそのまま継承したかったけれども、できなかった。



▲岡田英弘（1931－　）
歴史学者。東京外国語大学名誉教授。主著に『歴史とはなにか』（文藝春秋）『世界史の誕生』（筑摩書房）『中国文明の歴史』（講談社）等。

例えば、郡県制と郡国制という言葉があります。秦の始皇帝は、全土に郡県制を敷いて直轄としたのに対して、漢は、直轄領である郡と、地方の王国が共存した郡国制を敷いたと説明するわけですが、それは、漢の初期には始皇帝ほど中央権力が強くなかったので、もともとあった地方の国が復活してしまっているんですね。それで一見両方併存させたみたいに見えるけれども、それは中央がわざとそうしたのではなくて、やむを得ず、中央政府が強くなるまで、そうせざるを得なかったというのが本当なんです。

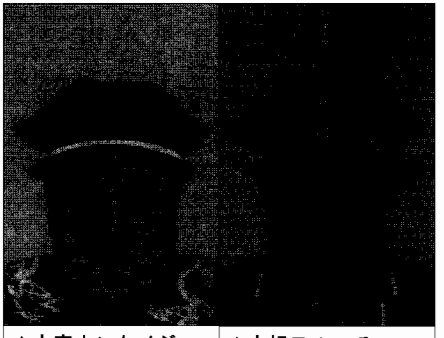
その土地の状況に合わせる

清朝の国家体制は一体どこからモデルを持ってきたかというと、やはり建国したときのその土地の状況に合わせたわけです。無理なことをしたらうまくいかないので、合同の国家をつくるために、狩猟民である満洲人、遊牧民であるモンゴル人、漢人農民の三種類の人たちの習慣を、初めはそのまま引き継いだわけです。

それで、清の最盛期の名君として有名な、康熙帝、雍正帝、乾隆帝、この三代の皇帝のときに、国家体制も少しずつ変質していった。それは余力ができたとか、敵に勝利したとか、土地を広げたとかということで、もちろん皇帝が一人でやるわけではない。皇帝の側近の満洲人や漢人の家来が、中央集権的な役所を整備しましょうとか、もっと漢風に行きましょうとか、それからモンゴル人に対してこんなふうに統治しましょうとか、そういう形で国家ができていく。清朝の出発点のときに、はっきりしたモデルができあがっていたわけではないけれども、

三種類の人々を、言葉や文字や慣習をそのまま維持して家来にし、連合国家にするという核はあったのです。

これはモンゴルにはなかった考え方です。モンゴル帝国は、じつは中央集権でも何でもない。はっきり言って国家体制としてはぐずぐずの、ゆるやかな連合体です。金さえ集めればいい。税金さえ中央に集まればいいので、統治の仕方とか国家組織というアイデアは全然なかった。モンゴルはどの地域を統治しても、治安が守られ、商売さえうまくいけばよかった。とにかく安全さえ確保したら、長距離交易は必ずもうかる。それがモンゴル人の目的です。



▲太宗ホンタイジ (1592-1643)　▲太祖ヌルハチ (1559-1626)

「中国の外側でできた新しい国家」

自分たちが集めて取って、ということだけを考えていて、それで軍事力を一所懸命維持したわけです。満洲人はモンゴル人とは違うタイプの人たちだったので、あれをとり入れ、これをとり入れ、三つの異なった要素を何とかうまく機能させようという努力をしたおかげで、清朝はモンゴルとは違う立派な国になった。軍事力では引けを取らないモンゴル人が、どうして清朝とロシアにあんなにあっけなく征服されたのかというと、**清朝とロシアは、確かにモンゴル帝国の継承国家から出発したのですが、非常に上手に変質した**のです。

ロシア中世史学者たちも、ルーシからロシアになったとき、モンゴルの影響はどれくらいあったのかを、今一所懸命に考えているんですが、やはりロシアも変質するんです。モンゴルの影響を受けて、モスクワ大公国が国家らしい形態を持つようになるのだけれども、そこからじつに巧みに変化してロシア帝国が誕生する。**だから清朝も、中国の内部の中華王朝としての変質ではなくて、中国の外側でできた新しい国家とみなすことができる**と思うのです。

（全文は『清朝とは何か』に収録）

（おかだ・ひでひろ／東京外国語大学名誉教授）

世界史のなかで清朝を捉える初の試み！

別冊『環』⑯　岡田英弘編

写真・図版・資料多数
菊大判　336頁　3990円

清朝とは何か

〈インタビュー〉**清朝とは何か**　**岡田英弘**
Ⅰ 清朝史をどう視るか　Ⅱ 方法と展望　（聞き手＝編集長）

■清朝とは何か■

大清帝国にいたる中国史概説　宮脇淳子
世界史のなかの大清帝国　岡田英弘
マンジュ国から大清帝国へ――その勃興と展開　杉山清彦
漢人と中国にとっての清朝、マンジュ　岩井茂樹
清代満洲人のアイデンティティと中国統治　M・エリオット（楠木賢道編訳）

■コラム「『満洲』の語源」岡田英弘／「愛新覚羅＝アイシン=ギョロ氏とは」杉山清彦

■清朝の支配体制■

大清帝国の支配構造――マンジュ（満洲）王朝としての　杉山清彦
「民族」の視点からみた大清帝国――清朝の帝国統治と蒙古・漢軍の旗人　村上信明
大清帝国とジューンガル帝国　宮脇淳子
清朝とチベット――第五世ダライ・ラマと摂政サンギェーギャツォを中心に　山口瑞鳳
清朝とロシア――その関係の構造と変遷　柳澤　明
雍正帝の政治――「即位」問題と諸改革　鈴木　真
貨幣史から描く清朝国家像――清朝の複合性をめぐる試論　上田裕之

■コラム「北京で流行した満漢兼の子弟書」岡田英弘／「江戸時代人が理解したネルチンスク条約」楠木賢道／「満洲文字はモンゴルから、チャイナドレスは満洲服だった」宮脇淳子／「科挙官僚・祁韻士が作った『王公表伝』」宮脇淳子

■支配体制の外側から見た清朝■

「近世化」論と清朝　岸本美緒
江戸時代知識人が理解した清朝　楠木賢道
琉球から見た清朝――明清交替、三藩の乱、そして太平天国の乱　渡辺美季
蝦夷錦、北方での清朝と日本の交流　中村和之
清代の西洋科学受容　渡辺純成
近世ユーラシアのなかの大清帝国――オスマン、サファヴィー、ムガル、そして"アイシン=ギョロ朝"　杉山清彦
大清帝国と満洲帝国　宮脇淳子

■コラム「磁器と透視遠近法と雍正改革のはざまで」渡辺純成／「太平天国の乱」岩井茂樹／「『満文老檔』と内藤湖南」宮脇淳子　〈付〉清朝史年表／関連地図ほか